

「東北日本と西南日本」の課題と意義

山田安彦

I. 課題設定の動機

1991年度は標記の課題を共同課題として、本学会は研究を進展させることに努めてきた。その成果として、本学会機関誌「歴史地理学」157号をはじめ、その他の号に論説が掲載されている。

1992年度は前年度の成果を基にして、同課題で会員相互に研究成果や見解を交換し討論して、今後の新しい秩序の地域的指針を探求しようと努力する。

本誌157号に筆者も説述したように、わが国は東北から西南にかけて、緯度にして22度弱、経度にして約26度の長距離にかけて伸びる、いわゆる花綵列島と呼ばれる日本列島が連なる。したがって、気候的にも、地形的、地質的にも甚しい多様性に富む。それを大規模な蓋然性で捨象すると、端的に言って、西南日本は温暖であり、東北日本は寒涼である。このように明白に相異なる環境を基に永い歴史が営まれると、どうしてもそこに醸し出される文化風土には自ら歴然とした違いが現れる。いうまでもないが、歴史が長ければ長いほど、環境と人間の存在形態は密になる。

自然的環境が異なれば、土地を対象とする生産、とくに農業生産や経営面に大きな違いが生じてくる。わが国のように季節風の影響を受けて雨量が豊富で高温の場合、水田稲作農耕に適している。そのためこそ、水田稲作農業がわが国の基幹産業となり、稲作農耕と関係の深い仏教とが相まって、わが国の基底文化を形成した。

自然環境が多様であるから、生産形態、経営面、生産性も多様であり、民俗、社会制度までも微妙に異なり、これが基盤となって近代工業や近代社会組織構成にまで影響していることを忘れてはならない。

顕著な事例を掲げるまでもないが、気候と地形環境により、水田農耕生産は水田二毛作と水田単作地帯に分れる。いうまでもなく、歴史的にみて、前者の地帯は生産性が高く、農家経済余剰も購買力もあり、それが近代工業や近代都市形成まで素地的に影響してきた。そのみならず、近代的開拓や地域開発にも波及的に効果を与えた。換言すると市場性にも及んだのである。ひいては経済の南北性、政治の東西性という両分性にまで、素地において因子を秘めることになった。これらについては、本誌157号の拙稿に既述しておいた。

東北から西南に長く連なり、自然環境が対照的であるから、どうしても文化風土が両分的になる。そこで今までの説述的展開を換言して端的に整理すると、わが国は大部分が同じ民族であり、政治は同じ制度であり、同形態であり、また基幹産業も同じであるにもかかわらず、何ゆえに両分化したのが課題である。近代までは流通伝播の速度がおそいので両分性は成り立つが、近代にはいると、市場経済が発展するとともに流通の速度が早くなり、さらに現代では情報行動が高度に発展すると、次第に地方色や地域的特性は解消し、対照的な両分性の明瞭が薄弱になってきた。むしろ脱地域化傾向を迎えている。しかし、それでもわが国の文化風土の根底においては、両分性の要素が潜在している。

のではないかと考えられるところがないとはいえない。

さて、このように両分性ということになると、比較とは、対比とは何かということになる。市場経済が甚しく発達するまでの近世末までと、それが大きく発展した近代以降とでは、わが国の場合、両分性の状況が著しく異なってきた。比較と対比についてはそれぞれの論者に持論があると思う。筆者もまた本誌の152号と157号に若干の私見を展開した。標記のような課題の場合、比較・対比論は、取りあげる指標、時代、地域により、比較対比が可能であったり、不可能な場合がある。また、要因や条件を限定しないと、水掛論になる恐れがないとはいえない。

わが国に限らず、政治的東西性、経済的南北性は何ゆえ持続するのか。持続すべきなのか、解消すべきなのかは研究課題である。かかる課題では、ややもすれば、従前の理論や他分野の研究課題の復習になったり、また論評になり常識論的になる場合が多い。それに落ち入らないように活発な議論を展開し、積極的に討議を進展させるために、視野広く、かつ精緻な分析と論理的な論究を蓄積されている論者を選択し、基調報告を依頼することにした。

II. 基調報告への期待

かかる観点では、標記の課題で当討議を世話する筆者の主観的な期待であって、基調報告者はこれに関係なく議論を展開すればよいのである。ただ、筆者はこのような問題意識から発表をお願いした。依頼する際には、本稿に説述しているような期待に類することは若干願望しておいた。

まず、元木教授には水田稲作から「東北日本と西南日本」の地域構造を論じ、その意味内容を明確にしてほしいために依頼した。教授は永年にわたり、水田の構造、分布状況、水田稲作生産の日本経済における位置づけ、および水田の将来への展望について、精力的に実地調査を展開し、その分析により世界的な稲作生産における日本の水稲耕作の意義について研究を蓄積

している。

つぎの末尾教授は40有余年の永きにわたり、日本国内はもちろんのこと、海外にまで水車利用による人間生活や生産への応用利用について研究を続行している第一人者である。教授はさらに、その研究を基礎にして、水力利用発電による地域社会への波及影響についても精緻な研究を進展している。そこで、教授には水力利用の地域化、技術革新による水力利用の地域構造の変容による地域の等質性と結節性についての論及を期待した。

第3の竹内教授は、多くの国土で、地域で両分性が持続するのは、根底には歴史性、政治的領域の所属、それに経済的収奪、住民的偏見、差別意識、それに外部地域との接触内容の相異があげられると主張している。

つぎの発表は西川教授で、教授の地域論は明晰な論理の展開により、「東北日本と西南日本」の両分性の経緯と意義、加えて日本国土は地域的に多様であるが、大きく両分化される必然性と社会への影響などについて論じてほしいと願った。この論及が最近停滞気味である地理学を活性化し、また再創生にも関連するであろうと、筆者は大いに期待している。

つぎは谷岡教授で、地域の歴史を溯及的に分析し、比較研究するという手法で谷岡歴史地理学を編んだ。教授には、時代によって地域のカテゴリーがどのように異なり、過去からわが国は大きく両分化されるが、それが如何に変容してきたかについて説明して欲しく望んだのである。

III. 未来への試み

かかる意図であったが、筆者の不手際と力量不足で、筆者の意向を充分に5人の基調報告の教授諸公に伝えられなかったので、討議が満足に展開出来なかったことを反省している。また、聴講者諸氏に欲求不満なものを残してしまったように、筆者自体が感じ、世話人として、また司会者として悔いは残る。

さて、標記の課題は歴史地理学のみならず、

むしろ早くから民俗学、歴史学、社会経済史学や文化史学、農業経済学、また文化人類学、最近では統計学の分野も研究対象の一部として取り上げ、それらの専門分野で注目すべき成果を収めている。それなのに、地理学、あるいは歴史地理学では、最も先導的立場にありながら、やや遅れ気味ではなかろうか。他分野の研究の成果を批判したり、論評するのもよいが、より前に進むためには、不十分でもよいから、自分の研究成果を問うべきある。決着をつけるべき問題ではないが、「東北日本と西南日本」について何かの提唱をすべき時期ではないかと考え、厚顔にも世話人と司会を引き受けてしまった。

「東北日本と西南日本」といえば、筆者も含めて大方は、対比とか比較ということが念頭に浮ぶであろう。対比とか比較に関しては筆者なりの概念がある。これはすでに本誌152号と157号の拙稿に説述したので詳しくは避けるが、いずれにも、つまり対比と比較には目的が不可欠となる。前者はカテゴリーを明確にしておかないと不能であり、それによって踏襲性と創造性が把握しうる。また後者の場合は、同じ基準尺度を設定することによって、共通性と相異性を理解しうるのである。

かかる二つの観点で標記の課題を分析するのは重要であるが、もう一つ捨て難いのは、歴史地理学から標記課題への接近ということになれば、地域構造の違いというか、特異性に焦点を当てたかった。すなわち「東北日本と西南日本」という地域構造の違いが何によって生じたか。自然的基礎にあることは否めないが、時代によってカテゴリーは異なる。わが国の基底産業であり、基底文化の土台となった水田稲作から観た場合、また水利用の技術革新によって東北と西南がどのように変わってきたかを捉えて、文化の構造によって、地域の構成により、さらに歴史の要因によって、時代という社会構造によって東北と西南がどのように発展し、進化し、変化してきたかについて、本課題によって把握したかった。会員諸公の御教示と御叱正を仰ぎたい。

基調講演はそれぞれすべて蘊奥を極め蘊蓄の深い内容であり豊富な示唆に富むものであった。討議の流れに瀬があったとするならば、それは司会者としての筆者の不手際と内容咀嚼力の不足によるもので、筆者の責にある。御寛恕を乞う次第である。

(千葉大学教養部)